



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3964 号 2017.10.18 発行

誉め言葉は「お前バカなことしてるなあ」「異才育成」プロジェクトとは？



大平誠 AERA 2017 根 10 月 17 日  
出展したロボットを見せながらの成果発表。製作者の二人は、中邑教授を



説得してモーター数十個  
など部品の購入に成功し  
た。熱意が扉を開く（撮  
影／植田真紗美）  
全国から集まる ROCK  
ET 生たちは、従順な子  
羊などではない。厳寒の  
東北で漁に挑む老夫婦ら  
の生き様に触れ、甘えた  
殻を脱ぎ捨ててきた（撮  
影／植田真紗美）



東京大学先端科学技術研究センター教授（人  
間支援工学分野） 中邑賢龍さん（61）／香川大学教育学部助教授、米国や  
スコットランドの大学で客員研究員などを経て現職（撮影／植田真紗美）

受験に失敗したら才能がないのか。そんなことはない。キミの能力は眠っているのかも。そんな才能を呼び覚ます試みが今始まっている。

将来ノーベル賞につながるような、先進的でユニークな研究者を育成できる場とは何か。どんな人材が群れを抜け出し、誰も考えつかなかった技術革新をなすのか。そもそも凡人が目指して取れる賞ではないし、賞の獲得を動機にした研究など本末転倒だが、突き抜けた才能は必ず、いつの世にも存在する。そうした人材発掘のヒントが、詰め込み教育とは無縁、東西の大学で進む二つのプロジェクトの中にあった。

「揃いも揃って変わり者のみなさんこんにちは。1 期生のヘンな絵を描く不登校中学生のハマグチエイシです。こんな変わり者の私たちにとってここはとてもよい場所です。間違えないように、バカと思われないようにと過ごしてきた学校生活と、ここは全く違いました。『お前、バカなことしてるなあ』がここではむしろ褒め言葉なのです」

東京大学先端科学技術研究センターで 9 月 25 日、日本財団と同センター共同の異才発掘プロジェクト「ROCKET」の成果発表会があり、濱口瑛士さん（15）はタブレットに綴った原稿を読み上げた。読み書きがうまくできない「書字障害」で、小学校時代から漢字のテストは毎回零点。幼いころから同級生らにイジメられ不登校になった彼は、絵やファッションなどの表現力に秀でた天才だ。まもなく第 2 弾の画集を世に出し、来春には絵本も出版する。

発表会では他にも、自律型ミッションロボットで世界コンテストを目指す大阪の高校生

コンビ、5次方程式に解の公式が存在しないことを証明する「ガロア理論」を淀みなく説明する小学4年生など約25人が、この一年の取り組みを披露した。

このプロジェクトは、突出した才能がありながら、教育環境に馴染めず不登校傾向にある小中学生を選抜し、継続的な学習と生活の支援をする制度で、毎年500人以上の応募がある。初年度の2014年度は15人、15年度の2期生は13人、16年度の3期生は31人を選抜した。発表会で第3期は終了し、今年度から4期生が加わるが、ROCKETには「卒業」の概念はない。様々な分野で活躍するトップランナーによる講義、料理や工作など多彩なプロジェクトベースドラーニング（PBL）の他、数学・物理や歴史など興味の異なる5分野でグループ学習にも取り組み、個々人がやりたいことを申請し、自分の能力開発を加速させていく仕組みだ。

#### ●技術でカバーできない

このプログラム、主宰する同センターの中邑賢龍教授の個性と熱意に負うところが大きい。身体障害を工学分野から支援する研究を続け、香川大学などで教鞭を執ってきたが、05年に東大先端研に着任してからは認知障害や精神障害に軸足を移していった。身体障害とは違い、技術でほとんどカバーされていない領域であり、社会や学校で不応を起している子が大勢いることにも気づいたからだ。その中邑教授は言う。

「豊かな才能があるのにバランスが悪い故に入試を突破できない。例えば瑛士はワープロ入力ならすごい文章を書く。でもペンをとって書くのは苦手です。また、日本語の読み書きが辛うじてできても、英語になると途端に読み書き障害を起こす子の割合が中学校には概ね10%います。そういう子は数学が天才的にできたとしても、そのレベルに見合った高校や大学には進めない。そういう理解が社会にないから、彼らはいまだに学習の遅れた、努力しない子とみられるわけです」

こうした切実な思いに共鳴した日本財団が、助成だけでなく能動的に参画する試みとして、ROCKETは始まった。社会や学校から排除されたが故に、逆にとことん好きなことをやれる時間を得た子どもたち。そんな彼らに、中邑教授は徹底的に実証主義を叩き込む。リアリティーに基づく疑問を持たせ、気づきを積み重ねて、たくましくなるよう導くわけだ。

#### ●形を変えた優生思想

昨秋の海外研修は、ナチス・ドイツのアウシュビッツ収容所や、ロボット工学を応用した義肢などを用いた障害者のスポーツ大会サイバスロンなどを訪れた。

「サイバスロンを見た彼らは『歩けないような人が速く階段を上れるような技術を競っている。すごい』と称賛し、アウシュビッツでは『化学薬品を使って人間を実験台にして虐殺している。科学技術の悪い例だ』と断罪しました。普通の教育ならここで終わりです」

だが中邑教授はそこで終わりにしない。人と違うから、劣っているからなどと虐げられ、引きこもっていた自分たちとどう違うのか、と問う。現代では妊娠して羊水検査で発生異常が見つかり、圧倒的多数が産まないという選択をするのではないかと。

こうぶつくと、子どもたちはざわつく。走れたり重いものを持つことを目指すサイバスロンも、形を変えた優生思想ではないのかと初めて気づくのだ。「科学技術がみな同じほうを向いているのにヒトラーだけを責めることは抜本的解決ではないことを、彼らのようなエキセントリックで集中力のある人たちには考えてもらう必要がある」とも思う。

国内研修では「最果ての旅」と題し、東京駅から南北2チームに分け、スマートフォンを没収し、「枕崎（鹿児島県）と稚内（北海道）に各駅停車で6日以内にたどり着け」と指令を出した。気が遠くなるほどの距離のはずだが、帰りは東京まで飛行機で2時間足らず。子どもたちは技術革新で現代人が距離感を失ったことを体感した。

天才児教育でも、ギフテッド教育でも、入学試験をゴールとする教育でもない。しかし、無駄を楽しみながらも責任感を身につけ、0から1を生み出すイノベーターを育成する機運が、そこには満ちている。

西日本でも面白い試みが進んでいる。京都大学が次世代研究者育成支援として09年度か

ら始めた「白眉プロジェクト」。豪腕で知られる松本紘・前総長（現理化学研究所理事長）が導入した遊び心に溢れた制度だ。総長直轄の「白眉センター」が、毎年 20 人の若手研究者を採用、5 年という身分保障の中で伸び伸びと研究を深められる。

### ●5 年間好きなことを

どんな取り組みか。例えば、白眉 4 期生で量子コンピューター研究で大きな成果を上げ、東京大学の助教に転出、この 10 月に京大大学院理学研究科の特定准教授に就任した藤井啓祐さん（33）。量子コンピューターは、情報を「0」か「1」で処理する従来型コンピューターと異なり、「0 と 1 が重ね合わさる」という量子の性質を利用しており、スーパーコンピューターでも何十年とかかるような問題を一瞬で解くことができると理論的に予想されている。計算能力は劣るが組み合わせ最適化問題に特化した専用量子マシンはすでに商用化されており、万能な量子コンピューターの研究開発には巨大 IT 企業なども次々参戦している。こうした動向の背景には、多くのノーベル賞級の理論的発見や実験的ブレイクスルーがある。

「5 年がありがたいんです。僕の研究分野は日本でほぼやっている人がいなくて、学生時代から後ろ盾がない状況だった。博士課程後（通称ポスドク）の職を見つけるのが大変で、拾ってもらった大阪大学では文部科学省のプロジェクトで 2 年間、必死で年に 5 本ペースで論文を書いた。それで白眉に採用されたんですが、5 年好きなことをやりなさいと言われると、最初の 3 年ぐらいは次のポジションを考えずに思いきり研究できるので短期間で成果が出やすい。僕もそうですが、結果的に 3 年ぐらいで他に転出される方が多いですね」（藤井さん）

部際で集まる多彩な人材との交流が視野も広げる。藤井さんも白眉にいる農学系や情報系の仲間と共同でコンテストの優秀賞を獲得。さらに、続く。

「今の共同研究者も白眉出身。タコ足を模したシリコン製のソフトロボットをグニャグニャ振って計算しようという人です」（同）

ROCKET と白眉。閉塞感に満ちた現代社会を飛び出して、無限の宇宙まで突き抜ける。（編集部・大平誠）

※AERA 2017 年 10 月 16 日号

## 尻を打たれ、丸刈りに… 父に虐待を受けた医師の壮絶体験 文・岡崎明子 写真・池永牧子



朝日新聞 2017 年 10 月 17 日

シリーズ・ラファエルさん＝池永牧子撮影

■虐待防止へ、壮絶な体験つづる  
シリーズ・ラファエルさん（33 歳）

「私の子ども時代を一言で表すとすれば、『孤独と恐怖』です」

医師としてがん研究に打ち込む傍ら、仏政府の虐待防止計画にかかわる。充実した日々の陰には、壮絶な子ども時代があった。

娘を一流のピアニストに育てるため、父の常軌を逸した「しつけ」が始まったのは 4 歳のとき。部屋に鍵をかけられ、1 日 7 時間の練習を強いられた。間違えると尻を革ベルトで打たれ、丸刈りに。気分次第で食事を抜かれ、深夜、食事に水を加えて混ぜたぐちゃぐちゃの夕飯を食べさせられた。「いつか殺される」と、あらゆることに神経をと



ぎすませ、心休まるときはなかった。

「スマホ老眼」若者に急増 目の酷使で調節機能低下 東京新聞 2017年10月17日

### スマホ老眼への対処法



まだ20代、30代なのに「手元が見づらい」「ぼやける」といった老眼のような症状を訴える人が増えている。スマートフォンを長時間使うなどして目を酷使することにより、一時的に目のピント調節機能が衰える「スマホ老眼」と呼ばれる症状だ。専門家は「重症化すると日常生活に支障を来す恐れがある。早めにケアを」と呼び掛けている。(小中寿美)

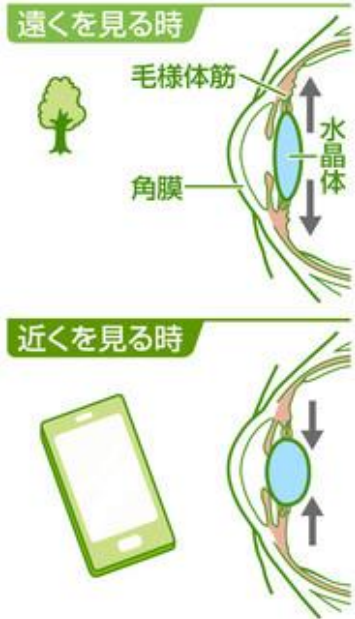
「目がしょぼしょぼして開けていられない」。神奈川県内に住むフリーターの女性(22)は八月、つらい症状に悩まされて眼科に駆け込み、スマホ老眼と指摘された。アルバイト先の飲食店では注文の入力や食材の発注でタブレット端末を頻繁に使う。さらに就職活動を始め、求人情報を探すためにスマホを毎日三時間近く見ていた。

遠くを見るとぼやけたままで焦点が合わず、目の奥に痛みを感じ、頭痛や肩凝りも。処方された目薬を使い、スマホを見る時間をなるべく減らすと、症状は改善して楽になった。

眼精疲労が専門の梶田眼科(東京)の梶田雅義院長(64)によると、スマホ老眼は医学的には「調節緊張」と呼ばれ、遠くがぼやけるだけでなく、手元が見づらくなることもある。スマホの普及に伴い、二〇一〇年ごろから二十代を中心に患者が増え、中には十代もいる。

ピント調節がスムーズにできなくなる状態は老眼とよく似ているが、原因は異なる。そもそもピント調節はどう行うのか。カメラのレンズのような働きをする「水晶体」の厚さを、周りの筋肉の「毛様体筋」を動かして変える。近くを見る時は、毛様体筋に力を入れて水晶体を膨らませる。

### 目のピント調節のしくみ



加齢とともに水晶体が硬くなったり、毛様体筋が衰えたりして起きるのが老眼で、一般的に四十代以降に始まる。スマホ老眼は、水晶体は軟らかいままだが、目の酷使によって毛様体筋が凝り固まることで起こるといふ。

「患者の多いドライアイも実はスマホ老眼が原因のケースが多い」と梶田院長。放置すれば「めまいや吐き気、重症になると自律神経に影響を与え、不眠やうつにつながる可能性もある」と話す。

調節緊張の患者はパソコンが普及した際にも増えたが「スマホの方が事態は深刻。文字が小さく、近い距離で見るため目にかかる負担は大きい」と指摘する。混雑した電車内では、顔のすぐ近くで画面を凝視している人も少なくない。

すぐにできる対策は、定期的に目を休めて遠くを見ること。目安は十分に一回で、四~五メートル先を見る。目を温めて血行を良くし、毛様体筋の緊張をほぐすことも有効だ。温めるのは就寝前がよいという。

#### ◆遠く見て休めて

目の健康維持に関する啓発などに力を入れる眼鏡小売りの大手メガネスーパー(神奈川県小田原市)は、スマホ老眼かどうかなど目の状態を詳しく調べる検査メニューを開発し、昨年秋から全店舗で行っている。

眼鏡を購入する際、客は問診票を記入。その結果、スマホ老眼が疑われる場合は専用の検査を行い、目の緊張をほぐす運動の方法も指導する。スマホ老眼とみられる客は全店舗合わせて月三千人に上り、症状が著しいときは眼科の受診を勧めている。

検査の研修を担当する同社の堀川義晴さん（46）は「スマホの普及が影響している」と推測。「休憩時間に遠くを見るよう以前からアドバイスしてきたが、今はその時間にスマホを見ている」と嘆く。目を休める意識を持つことが大切だ。

検査は有料。運動の方法などスマホ老眼対策は同社ホームページの「アイケアコンテンツ」で見られる。

#### 再生医療の登録制度開始 安全対策でiPS移植も 共同通信 2017年10月17日

再生医療の安全対策や新たな治療法の開発に役立てるため、厚生労働省と日本再生医療学会は17日、再生医療の臨床研究に参加した患者の情報などを登録するデータベースの運用を始めたと発表した。

手始めとして、他人の人工多能性幹細胞（iPS細胞）からつくった目の細胞を患者に移植した理化学研究所の臨床研究を近く登録する。

データベースには、性別や年齢といった患者の基本情報のほか、移植した細胞や、元になった幹細胞の情報を保存。

臨床研究で副作用などの問題が起きた場合には、移植した細胞の情報を追跡調査するなどして安全対策に役立てる。

#### 視覚障害者 「転落防止協力を」 支援学校生呼びかけ JR仙台駅 /宮城

毎日新聞 2017年10月17日

利用者にチラシを手渡す半沢竜太さん＝JR仙台駅で

県立視覚支援学校（仙台市青葉区、遠藤吉夫校長）は11日、JR仙台駅構内で、電車を利用する視覚障害者への積極的な声掛けや、点字ブロックの利用を妨げないよう協力を呼びかけた。

大阪府高石市で1日、ホームから転落した全盲の男性がはねられて死亡するなど、各地で視覚障害者の転落事故が相次いでいる



#### 【トップは語る】障害者や高齢者に優しい企業を表彰 Sankeibiz 2017年10月18日

□日本ユニバーサルマナー協会代表理事・垣内俊哉さん（28）

――初開催する「ユニバーサルマナーアワード2017」の表彰式が24日に行われる

「障害者や高齢者ら多様な人々にとって心地良い取り組みであるユニバーサルマナーを実施している19の企業・団体を表彰する。小さな企業・団体も選ばれており、多岐にわたる。エントリーした42社・団体もメーカーやサービス、金融、自治体など多様で、障害者・高齢者対応に自信を持って取り組んでいることが分かった」

――表彰式を始めた理由は

「ユニバーサルマナーにコストをかけて取り組みながら、人目につかず知られていない企業は少なくない。こうした気配り、心配りができる企業を社会で褒めたたえる必要があると考えた。ユニバーサルマナーの必要性を理解し、機運を高めるイベントと位置付けている」



ーユニバーサルマナーへの関心は

「高まっている。当協会のマナー検定受講者は3万人に達し、数千、数万人単位で受講する企業も出てきた。若い人も関心を持っており、夏休みに受講料5000円を払って親子や兄弟で受けに来る中高生もいる」

ー障害者らに声をかける若者が増える

「ユニバーサルマナーが普及する時代が来ると、ひしひしと感じる。20年の東京五輪・パラリンピックに向かって機運は盛り上がるだろうが、それ以降は障害者への心遣いが停滞しかねない。障害者への思いやりは格好良い、スマートで、しかも当たり前な社会にしたい」

ービジネスにも生かせる

「障害者にとってのバリアを解消すれば外出機会は増える。買い物や飲食する際に選ばれるのは障害者に優しい企業だ。しかも家族や友人と出かけるので消費額も増える。社会貢献だけでなく確実にビジネスにつながる。企業は優しさを情報発信すべきだ」

【プロフィール】垣内俊哉 かきうち・としや 2012年立命館大経営学部卒。在学中の10年に、ユニバーサルデザインの浸透を目指すコンサルティング会社「ミライロ」を設立し、社長。13年日本ユニバーサルマナー協会代表理事。岐阜県出身。

甘い香りほんのり ジャガイモの漬け床販売 神戸 神戸新聞 2017年10月17日  
農福連携で開発された調味料「神戸初産しっとり漬床」＝神戸市北区有野中町2、陽気会



神戸市北区の社会福祉法人「陽気会」が、農家と連携し、障害者が栽培したジャガイモを使った漬け床「神戸初産しっとり漬床」を販売している。米ぬかのぬか床のような臭いがなく、ほんのり甘い香りがあるのが特徴。「米ぬかが苦手な人やアレルギーの人には特にお勧め」とアピールしている。

同会は休耕田60アールを借りて、知的障害者ら約10人と職員とで野菜を栽培している。2年前、安定収入を得るために独自商品を検討していた際、野菜や果物の栽培と食品加工を手掛ける波々伯部宏さんと知り合い、農福連携プロジェクトをスタート。販売に向かない小さなジャガイモなどを有効利用する漬け床を開発した。

しっとり漬床にキュウリを漬けると冷蔵庫で3時間で浅漬けができる。また、肉や干物に塗ると塩こうじのように軟らかくおいしくなるという。毎週金曜午後に陽気会事務所前で直売するほか、同区の農産物直売所「はっばや神戸 野菜ごはん」やドラッグストアのウエルシア薬局神戸西山店（木曜のみ）でも扱われ、1袋600円程度で販売している。

同会の澤村友也さんは「いろんな使い方で楽しんでほしい」と話している。（辻本一好）

超高齢化に成長の種 移動手段・介護現場に技術革新  
産経新聞 2017年10月17日

道の駅にしかたで行われた自動運転実証実験＝栃木県栃木市（水野拓昌撮影）



黄金色の稲穂が風にそよぐ田園地帯に延びる市道を5人の乗客を乗せた小型バスが時速10キロほどでゆっくり進む。そのバスにはドライバーの姿はなく、運転席やハンドルさえない。

栃木県栃木市の道の駅「にしかた」を拠点に国土交通省が9月7日に行った自動運転の実証実験だ。

使われた車両は6席の電気自動車。リチウムイオン電池を動力とし、最大速度は時速40キロ。GPS（衛星利用測位システム）などで位置を特定して、カメラとレーダーで障害物を検知する。一度通った道は記憶できる。

人口減少で過疎化が加速する地方において、自動車の運転ができなくなった高齢者らの移動手段をどう確保するのか。「100歳時代」の課題解決策として大きな期待を集めているのが、国内外の自動車メーカーやIT企業が開発にしのぎを削る自動運転技術だ。

新しい交通システムを研究する東大大学院新領域創成科学研究科の稗方（ひえかた）和夫准教授（工学）は、車の未来をこう予測する。

「車を呼ぶと、無人運転の車がやってきて、指定の場所まで運んでくれ、降りると自動制御で帰っていく。運転席はなくなる」

政府のIT総合戦略本部は完全自動運転の実現時期を「2025年」と見込む。稗方氏は「高速道路を自動走行車だけが走るならそれほど難しくないが、急な車線変更や割り込みへの対応や歩行者との共存は容易でないだろう」と指摘する。高いハードルを乗り越える技術革新がカギを握る。

ドローンで配達

瀬戸内海に浮かぶ愛媛県今治市の大三島。ブーンという音とともに小型無人機の「ドローン」が現れた。

地面に敷かれた赤いシートの上に着陸し、利用者がスマートフォンで注文した生鮮野菜が入った重さ1キロほどの箱を降ろし、再び飛び立った。昨年10月、インターネットサービス大手、楽天が中心となって実施した配送実験だ。

ドローンはGPSを利用して自動で飛行し、コントローラーで人が操作する必要はない。目的地に近づくとカメラで着陸地点を捕捉し、3メートル四方の範囲に着陸し、荷物を届ける。

過疎地で自前の移動手段を持たない高齢者は、“買い物弱者”でもある。楽天ドローン事業部の向井秀明ジェネラルマネージャー（37）は「人手が足りない地方の商店が、配送や出前に使えるようにしたい」と意気込む。

転倒事故を回避

神奈川県葉山町の介護付き有料老人ホーム「SOMPOケア ラヴィーレ葉山」。生活相談員を務める安田俊昭さん（29）は「どうすれば入居者の転倒を回避できるのか。職員の努力だけでは対処しきれないのが実情だった」と打ち明けた。

元気だった入居者が転倒による骨折で歩行困難になり、急速に身体機能が低下してしまう。転倒は高齢者にとって“致命的”なけがにつながりかねない。しかも、転倒事故は施設職員の見守りが手薄になる夜間に起きるケースが多い。

最先端の通信技術を活用することで、高齢者の“転倒リスク”や、見守る職員の負担を低減する取り組みも行われている。

同県とNTTドコモなどは今年1月から同ホームでセンサー機器を使った実証実験を始めた。入居者に歩数や消費カロリーなどを記録するウェアラブル端末「スマートウォッチ」を装着してもらうと同時に、ベッドに睡眠センサーを設置。血圧や体温、居室内の温度や湿度などさまざまなデータを収集するシステムを構築し、職員がリアルタイムで入居者の活動や睡眠状況を把握する。

ある80代の女性入居者は「夜間、見回りに来てもらうたびに起きてしまうからもう来ないでほしい」と神経質になっていた。ところが、睡眠センサーなどのデータを分析すると、実際には職員が2時間ごとに見回りに来て女性も目は覚ますことはほとんどなく、逆に頻繁に昼寝をしていたことが分かった。分析を元に昼間に体操や外出する時間を増やすように促してみると、女性は規則正しい睡眠を取れるようになり、落ち着きも取り戻したという。

人手頼みで担い手の足りない介護の現場では、技術革新（イノベーション）を活用し、改善する余地は大きい。

超高齢社会の課題解決策をビジネス化することを目的に同県が設置した「未病産業研究会」には現在、NTTドコモなど492社（9月1日現在）が参加。さまざまな成長産業の「シーズ（種）」が生み出されつつある。

超高齢社会のトップランナーである日本は、世界に先駆けて、さまざまな課題解決に挑まなければならない。そこから創出されたイノベーションは人口減少の厳しい現実に直面する日本が輝き続けるための活力となり、快適な長寿社会を実現させる手立てとなる。

この企画は大坪玲央、川上朝栄、桑原雄尚、黄金崎元、佐久間修志、佐藤好美、松村信仁、水野拓昌、道丸摩耶、山口暢彦が担当しました。

## 予算編成、報酬改定を注視 全社協の懇談会に議員ら300人



福祉新聞 2017年10月17日 編集部  
国会議員や厚労省幹部も出席した

全国社会福祉協議会は5日、都内の全社協・灘尾ホールで、3回目の福祉懇談会を開いた。加藤勝信・厚生労働大臣、松山政司・1億総活躍担当大臣のほか国会議員や厚労省幹部、全国の乳児から障害、高齢までの福祉関係者など300人以上が参加した。

開会あいさつで、斎藤十朗会長は社会福祉法人改革の結果、いわゆる内部留保がある割

合は1割に過ぎなかったと紹介。「ここ数年社福法人が受けた批判はあたらなことが分かった。自信を持ち、新しいステージに挑戦したい」と述べた。その上で政府、国会に対し「暮れにかけて予算編成と、介護と障害分野の報酬改定がある。実を挙げて頂きたい」と呼び掛けた。

政府を代表して、加藤大臣は「それぞれが必要なサービス。今後、社会がどう変わるかを見据えながら議論したい」と語った。

また福祉施設を代表して磯彰格・全国社会福祉法人経営者協議会会長が、福祉制度拡充に向けた財源確保などを要望。「社福法人への課税や、質の低下をもたらす規制改革は、福祉の基盤を揺るがす。早急に終止符を」と語った。

## マイナス改定阻止へ 老施協が決起セミナー

全国老人福祉施設協議会は5日、介護報酬改定決起セミナーを都内で開き、700人超の参加者が「マイナス改定を絶対阻止しよう」と団結した。

老施協の2016年度収支状況等調査（速報）で特養の収支差率は2・5%、赤字施設は34%で05年度以降最悪となったことが報告され「もはや限界。各種加算を取る努力をしても本体報酬が減った分は補えない。生産性の向上、人づくり、サービスの維持のためにプラス改定が必要だ」とした。石川憲会長は「エビデンスをもって現場からの発信を丁寧に重ねていこう」と呼び掛けた。

なお老施協や全国老人保健施設協会、日本介護福祉士会など9団体は「介護の現場を守るための署名」活動を行っている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

